

二 我慢の板を擔ぎつゝ

物には、長短得失があつて、一概にいくものではない。一方の長所得點だけ見て、善いと定めこむのも、一方の短所欠點ばかり見て、悪いとばかり定めこむのも、共に擔板漢。一方に見て長所とする處が、同時に他方から短所であるかも知られず、此方に於て醜點だとする所が、同時に他面に於て美點であるかも知られない。柳の下にいつも泥鰌は居らぬとすれば、いつも杓子定規を振廻すのも、厄介な擔板漢、板擔ぎである。徳川時代平田篤胤一派の國學者が、無闇に佛法を嫌ひ、明治初年の佛法者が耶蘇教を攻撃し、現今の基督教者が時折佛敎を非難する如き、大方はこの擔板漢。我利々々の板を擔いで、却つて自家の愚を表明するのであります。

規則々々を擔ぐ人も、常識々々を振廻す人も、大抵はこの擔板漢で、畑で水泳を談じ、机上で空論を戦はして居るのです。やれ宗教は必要だの、必要でないのと得意氣に云ふのも、擔いだ板に遮られて、向の見えぬ人が多い。或る同行をしつかり、けなしてやるつもりで、「婆さん、お前一厘錢だなア」と云へば「ハイ私は一厘錢で、一向價値もありませぬが、貴君は一錢で結構です、併しお氣の毒な事には、一錢で向が見えぬ、私は一厘なればこそ、お蔭で向が見えます、何時お暇が出てもお待ち設けのお淨土、嬉しや勿體なや」斯う出られては仕方があるまい。

母の手一つで育つた侍の子。何でも學問勉強せねばならぬとて、京都へ登り或漢學の塾に入りました。三年ばかり勉強して一通りの經書も學習し、久振で故郷に錦を飾るといふ案排。淋しく待つて居た母の喜は幾計ぞ。定めし悴は餘程の偉い者になつたであらうと。村外まで迎ひに出る。向ふから悴は大威張でやつて參ります。今日でならば、シルクハットにフロックコー

ト、金縁眼鏡に光る靴、葉巻煙草にステッキとでも云ふべき出立。その當時
でいふ麻上下に大小、衣紋打ツ正しく練つて歸る。母は懐かしさに堪へ兼ね
踊り出て、「まア無事でよう歸つて呉れた、道中随分疲れたであらう」と側へ
寄れば、悴はキツと姿を正し、「これは母上様には、御健勝の體を拜し奉り、
恐悅至極に存じます、且つ今日は御迎への光榮を得て、恐懼恐惶再拜頓首」。
塾の先生に習つた通りの挨拶をやつたが、母には一向解らない。「まア親子ぢ
やもの、挨拶位云何でもよい、一緒に歸りませう」といへば「六尺を隔て、
師親の影を踏まず、母上お先に」と答へて、自分は一間も後からノソノソ付
いて行く。

母は聊か意外ではあつたが、それでも子は可愛い。お腹も減つたらうと、
家に歸り、兼ねて用意の御馳走を出す。とはいへ固より田舎の事だから、芋や
大根に蒲鉾位が關の山。處でこの蒲鉾の切方が少し歪んでゐた。それに目を
つけた悴。「君子は切目正しからずんば食はず」と、濟し込んで箸を執らない。
「いくら學者になつたとて親子ぢやもの、そんなに六ヶ敷云ふものでない」。
「苟くも聖人賢人の道を學習せる者、豈に田夫野叟の類と異なるなきを得ん
や」と角張る。「そないに云はれては、私は殿様の前でお叱りに會ふやうぢ
や」。「苟くも聖賢の教によつて、親しく孝道を立てんとする者を、殿様のお
叱りとは何事ぞござるぞ」。血相かへて母親を睨み付けたと申す事。

杓子定規も程々にせねばなりません。折角の孝行が睨みつけるやうになつ
て仕舞ふ。「たとひ正義たりとも、しげからんことをば停止すべき由」蓮如上
人は仰せられてある。『論語』塾の先生と云ふ、大きな板を擔ぎ込んで、無理
矢理之に當て嵌めやうとする、笑止千萬ではありませぬか。